

萬福寺の公式ホームページをご覧ください。

馬込萬福寺 検索 <http://www.manpukuji.or.jp>

## INFORMATION

## 仏事のご案内

ご家族皆様で参加しましょう

3.21(土・春分の日)

## 春彼岸法要

午後1時から春風亭柳朝師匠による落語、  
2時から法要

ご法要前の心の法話では、地元にお住まいの春風亭柳朝師匠をお招きし、落語を一席伺います。ご家族お誘い合わせのうえ、お出かけください。落語で大いに笑っていただいた後は、御先祖からいただいた今ある幸せに感謝してお墓参りをいたしましょう。

今年は3月18日(水)が彼岸入り、21日(土)お中日(春分の日)、24日(火)が彼岸明けです。

4.8(水)

## 花まつり

午前11時から法要

お釈迦様のご誕生をお祝いする「花まつり」では、屋根や四方を花で飾った花御堂をつくり、その中に釈尊の誕生仏を安置し、甘茶を注いで讃仏します。境内の桜の花もほころぶ季節でもあります。お誘い合わせのうえ、御参集ください。甘茶のティーバックがいただけます。



「大涅槃図」を説明されるご住職

御葬儀・法要の連絡は  
萬福寺本堂総受付まで

法要は「追善法要」ともいい、故人が浄土で安楽であるようにと願いを込めて行うものです。年忌法要は葬儀とは違い予定が立てられます。できれば半年前、少なくとも3カ月前には準備を始めましょう。

御葬儀・法要のお問い合わせ・お申し込み

萬福寺本堂総受付 ☎03-3771-2025

※梶原殿の会場使用につきましては、他社の葬儀社も利用できます。

萬福寺の行事はどなたでも参加できます。

26年度第3回  
写経会を開催

平成27年2月11日(水祝)

参加者全員で般若心経を讀経

**第3回** 写経会が2月11日(祝)、客殿(大広間)で開催されました。本年度最後の写経会とあって37名の皆様にご参加いただき、終了後には本殿でこれまで皆様によって書き上げられた「般若心経」の御写経を摩尼輪堂に奉納する法要が、安本由道副住職様式師のもとで営まれました。

法要に先だって波田野章研修委員長から、「本日は祭日でお休みのところ、大勢の方にご参会いただき、ありがとうございます。これからも明るく開かれた行事を行ってまいりますので、ご協力のほど、よろしくお願い申し上げます」とお礼の言葉が述べられ、法要では参加者全員で般若心経を唱和し、社会の平穏をお祈りしました。



写経を奉納し焼香する参加者



静かな中にも熱気があふれた写経会場

## 涅槃会法要

平成27年2月15日(日)

## 午

前12時から本堂右側に掲げられている「大涅槃図」の前で、安本利正住職様式師のもと、涅槃会の法要が執り行われました。この日はお釈迦様がインドのクシナガラでのご入滅になられた日です。「大涅槃図」には沙羅双樹のもと、右脇を下に臥して入滅するお釈迦様を多くの弟子が取り囲み嘆き悲しむ様子が描かれています。ご住職様から、「この図(絵)は江戸後期の作で、当時としては大変めずらしく、筆で描かれたものです」とのご説明がありました。

この日は晴天に恵まれたものの、風の強い一日でしたが、萬福寺護持会はじめ30余名が参列して報恩の法要を行いました。

## 編集後記

萬福寺山門下の向かって右側に、大きな掲示板が出来ました。お寺の行事や案内など、梶原殿の催し物等もあわせて、皆様にお知らせするためのものです。今年も萬福寺護持会ではいろいろと活動・行事を企画しております。『萬福寺だより』紙面とともに、護持会の行事等もお知らせして参ります。

本紙中にもありますように、南馬込三丁目、臼田坂上にある「磨墨塚」の管理をこのたび萬福寺がお引き受けすることになりました。梶原源太景季の愛馬磨墨の埋葬された塚、との伝承があります。歴史的遺産とお寺との結びつきがまた深まりました。春のお彼岸のお墓参りの折、『平家物語』の歴史の世界を楽しみながらお寺の近くを散策されるのも一興かと存じます。

## 萬福寺だより

# 緋の衣を被って 達磨姿になる

萬福寺住職

安本利正

達磨大師は千六百年前に南印度の香至(こうし)国の第三王子として生れ、やがて僧になって坐禅を修行して多くの弟子を育てた。今から千五百年前に(今の中国の北部)梁の国に来て梁の武帝と問答を交わしている。その問答は禅問答の代表として今でも伝えられ、日本の禅僧の入門式には、その問答を模して大声で「梁の武帝、達磨大師に問う」と発言して長い問答が続く大儀式がある。達磨大師はその後、嵩山(そうざん)へ移り、少林寺(今は少林寺拳法の本山)に住して面壁九年の坐禅の行を続けた(仮説では長年坐したので、足を失ったと伝えられる)。嵩山は極寒になると氷点下20度にも達する寒さであるから、達磨大師は緋の衣を頭から被って坐禅した。日本の紙だるまは緋の衣を被って坐禅する姿を示している。写真は、私が緋の衣を頭から被った姿です。

だるまいち  
達磨市の思い出

私には昔の思い出、大層愉快な思い出があります。

神奈川県秦野町の東道では毎年12月31日の大晦日の午後から夜中まで、道の両側に大小30店程の出店が並び、大層賑やかでした。特に平塚の業者は眉と口の両側に三段の大きい切り込みを入れて、そこへ黒い毛を長く植え込み長く垂らしたひげだるまを作る伝統がありました。黒く描いた普通の達磨とは違い、堂々たる風格があって特別に立派な姿なものですから、私は好んで毎年買い続けました。

この思い出は昭和40年頃のことだと思います。その頃は大変賑やかで最盛期でありました。私は各店の中で一番多く並んでいる店の前で1尺3寸のひげ達磨を注文しました。職人は奥の竹籠の中から取り出してきて「いいでしょう」と言いながら定価表を見て8千円と言いました。私はしばらく口上を聞きながら「高すぎる、5千円だな」と言うと、「旦那、それじゃあ職人泣かせだよ」と言ったが、私は「5千円」だと言いつづけました。

しばらくして着物のたもとへ手を入れたら1万円札が出てきました。その瞬間に、私は職人の味方をするように見えるべきだと思いました。その1万円札を差し出して「いいよ、いくらでも欲しいだけ取っときな」と言ったら、職人は鉢巻きに巻いている手拭いを手に取って顔を拭きながら前に出てきて、「旦那さん、私は気に入ってしまった」と言いながら札を1枚取り出して差し出してきました。5千円札でした。そして、その御札の上に百円玉一つ乗せて「この百円玉は私の気持ちです、どうぞ納めてください」と言いました。そして大きな声を上げて「おーい、いいお



客様に決まったよ。みんなのお手を拝借」と言うと、皆で手拍子、シャン、シャン、シャン、三度繰り返してパチ、パチ、パチの繰り返して最後にメシャンで(大声で)「おめでとうございます」と言って終了しました。

5千円にまけておいて更に百円玉一つのお返しに私は気をよくして千円札を1枚取り出して職人に渡したら、職人は手を合わせて頭を幾度も下げて、「ありがとう」と言い続けながら、だるまをビニール袋の中へ入れてくれました。

私は「ありがとう」と言って受け取り、いい気分でありました。この風景は何年たっても忘れられない、良い気分です。

昨年末には病気をしたので買いに行けず、友人に頼みました。そのだるまは萬福寺玄関の床に飾ってあります。

(安本 利正)